

上達の鍵は…強豪東小を偵察

10月、市内で開かれる「うつのみや百人一首市民大会」への出場を決意した京都出身のまちなか記者。とはいえ、上達の兆しが一向に見えず停滞気味に。「そんなんじゃ、本番で戦えないよ。子どもたちに一喝してもらいなさい!」と地域の人から紹介されたのは、百人一首の学習に力を入れている東小。なんでも9日には授業参観を兼ねた校内百人一首大会があると聞き、偵察に行った。

(多里まりな)

まちなか記者が行く

同校は一昨年まで、うつのみや百人一首の市民大会小学生の部で5連覇を成し遂げていた強豪校。しかし昨年は惜しくも敗退し、悔しい思いをした。

「ありあけの〜」。校門をくぐると、右手の体育館から百人一首を読み上げる声が聞こえてきた。早速お手並みを拝見しよう。

■紅白戦で鍛錬

体育館では、4〜6年生が紅白対抗の団体戦を繰り広げていた。

保護者が見守る中、児童は体育館に設置した畳の上に3、4人が肩を並べて向かい合う。時折チームのメンバーと相談しながら、目の前の札を一枚でも多く取ろうと目を凝らしていた。

「転校してきた子や(かるた取りが)得意じゃない子に覚え方を教えることもあります」と



体育館で開かれた校内百人一首大会。保護者が見守る中、紅白それぞれのチームが4人ずつ並び、協力して札を取っている

6年間で「いろは」学ぶ

京女記者の百人一首体験記 ㊦



かるた形式で和歌を覚える2年生の教室。札を裏表返して上の句と下の句を確認している

話すのは、5年鈴木遥香さん(10)と小島白葉子さん(10)。百人一首が、友達と交流を深めるきっかけになっているんやね。

学年別、ランダムで2戦を終えた児童の表情はさすががしい。勝利を収めた白組の6年田中晴菜さん(11)は「次は市民大会での王座を取り戻したい」と意気込む。記者も応援しています!

■一貫した指導計画

1〜3年生の教室では、児童がかかる形式で和歌を暗記していた。小さな体で勢いよく札を取る姿は、かわいらしくも勇ましい。

和歌を覚える学習はもちろん、歌の詠み方や独自のICT(情報通信技術)教材「百人一首成り立ち物語」で歴史などが学べるのも同校の特徴。6年間を通して百人一首のいろはを教えている。

約25年前に同校を卒業し、長男琉成君(7)の授業参観に訪れていた大曾4丁目、公務員高木佑輔さん(37)は「僕たちの時代にはこういう授業はなかったもので、ちょっとうらやましい」と目を細めた。

琉成君は自宅でも和歌を暗唱しているとか。「昔の言葉を通して歴史に関心を持ってくれるのはいいですね。算数は教えられ

ても、百人一首は分からないからなあ」と佑輔さん。学校の勉強が家族の話題になっているなんて、なんかすてきやなあ。

■学校に根付かせたい

同校で百人一首への取り組みが盛んになったのは10年以上前。百人一首の学習による教育的な効果を感じていた先生が率先し、宇都宮と百人一首のつながりや競技かるたの魅力を児童に伝えてきた。

市独自の教科「会話科」のカリキュラムに和歌に親しむ内容が導入された2012年以降は学校全体で取り組むようになり、授業のほか朝学習などでも実施している。

今や昼休みに児童が率先してかるた大会の練習に励んでいるんやって! 昔の文化には、現代の子どもたちをもとりこにする何かがあるんかもしれん。

吉成隆志校長(59)は「日本の文化や礼儀を学べるだけでなく友達とも仲良くなれるので、本校の特色として続けたい。そのためにも、百人一首の学習カリキュラムを学校に根付かせないと」と抱負を語る。

百人一首体験を通じて、宇都宮ならではの勉強にそしむ宮っ子の姿が垣間見られた。記者もうかうかしてんと頑張ります!

励む姿に記者も発奮